J.S.ミルの快楽論

連合心理学の観点から

林　和雄

はじめに

19 世紀英国を生きた思想家、ジョン・スチュアート・ミルは、代表的な功利主義者として知られている。彼自身の説明によれば、功利主義とは、幸福の増進が様々な人間活動の究極目的であるとする「功利性の原理（principle of utility）」、あるいは「最大幸福原理（greatest happiness principle）」を受け入れる立場のことであった（CW, X: 210, 214, 234）。それでは、ミルにとって幸福とは何か。この問いに対して、彼は「幸福によって快楽（pleasure）と、苦痛（pain）の欠如とが意味され、不幸によって苦痛と、快楽の欠如とが意味されている」と答える（ibid.: 210）。このように述べるとき、明らかに、彼はジェレミー・ベンタムの快楽主義を継承しているように見える。

しかし、ミルが快楽主義者であったと判断するためには、解決せねばならない問題が一つある。それは、彼が『功利主義論』で展開した、「快楽の質」の議論に関わるものである。一つの快楽を評価する際には、その量（quantity）だけでなく質（quality）もまた考慮しなければならない（ibid.: 211）、とする彼の主張は、1861 年の『功利主義論』刊行直後から激しい批判にさらされてきた。手短にまとめれば、その内容は次のようなものである。快い精神状態ほど価値が高いとする快楽主義の立場を採る以上、快楽の質という量以外の属性を評価に反映させることはできない。ミルは、快楽の質の差は量の差に還元されるとするか、快楽主義の立場を放棄するかの、どちらかに陥らざるをえないが、いずれにせよそれは『功利主義論』に明示されている主張とは

食い違う。以上のような批判に対して、ミルの主張を擁護することはできるだろうか。

長い期間、「快楽の質」の議論に対する評価は否定的なものがほとんどであったが、20 世紀後半の『ジョン・スチュアート・ミル著作集（*Collected Works of John Stuart Mill*）』刊行以降、ミルへの再評価が進むにつれ[1]、様々な仕方でその議論の整合性を指摘する解釈も見られるようになってきた。しかしながら、そうした新しい諸解釈には、共通する一つの欠点があるように思われる。それは、快楽を論じる際にミルがしばしば依拠している、連合心理学（association psychology）の枠組みについて、十分な言及がなされていないということである。後で確かめていくように、「快楽の質」の議論の背景には、ミルが『功利主義論』以外の著作で詳細に語っている、連合心理学の考え方がある。したがって、彼の主張の内容を正確に理解するためにはそれを参照する必要があるが、近年の「快楽の質」の議論の解釈者はそれに全く触れないか、触れるとしても重要な点で誤解していることが多い。

そこで本稿では、そのような新しい諸解釈の弱点を補うべく、連合心理学の枠組みに極力基づいて「快楽の質」の議論の内容を明確にし、その上でミルの主張を従来の批判から擁護することは可能か否かという問題を検討する。構成は以下の通りである。第 1 節では、『功利主義論』における「快楽の質」の議論の要点を確認する。第 2 節では、ジョージ・エドワード・ムーアによる『倫理学原理』の叙述を例に、その議論に対する従来の批判の内容を整理する。第 3 節では、第 4 節で「快楽の質」の議論を再解釈していくための予備的な確認として、『論理学体系』の叙述に即して、ミルの想定していた連合心理学の考え方の概要を紹介する。第 4 節では、『功利主義論』の叙述と『人間精神現象の分析』の注釈を主な手がかりとして、ミルにとって快楽とは、

---

[1] 『ジョン・スチュアート・ミル著作集』刊行後のミルへの再評価の気運とそれ以降の研究動向については、山本・川名［2006］を参照。

またその量と質とはそれぞれ何を意味するものであったのかを正確に理解することを試み、最後にそれを踏まえて従来の批判に応答する。

1. テキスト

本節では、本稿で解釈していく「快楽の質」の議論の要点を確認する。はじめに『功利主義論』という著作全体が持つ狙いと、その中で「快楽の質」の議論を含む第 2 章が果たそうとしている役割を簡単に確認した上で、テキストの内容を辿っていくことにしよう。

『功利主義論』は一般大衆に、また哲学界に向けて、当時不人気であった功利主義の立場の健全さをアピールするという目的をもって書かれた（Schneewind [1976] 35-8）。第 1 章「総論」において、ミルは功利主義を、「功利性の原理」ないし「最大幸福原理」を正不正の基準とする、あるいは道徳や立法といった「実践的な技術」の「第一原理」とする理論として紹介し、その「広い意味」での「証明」を後の箇所で展開することを予告する（CW, X: 205-8）。しかし、そのような証明がなされる前に、「その公式が正確に理解され」ていなければならない（ibid.: 208）。そこで、ミルは第 2 章「功利主義とは何か」において、功利主義への、大部分は誤解に基づく諸批判に応えるという形で、まずは自らの功利主義の構想を明確化することを目指すのである。

第 2 章では、はじめに功利主義の「道徳の理論」を基礎づけている「生の理論（theory of life）」が明示される（ibid.: 210）。それによれば、

> 快楽と、苦痛からの自由が目的として唯一の望ましいものであり、あらゆる望ましいものは［……］、それ自体に備わっている快楽のために望ましいか、快楽の増進及び苦痛の回避の手段として望ましい（ibid.）

「快楽の質」の議論はこのような「生の理論」に反発し、それを「豚にのみふさわしい学説」とする批判（ibid.）への応答として展開される。

ミルによれば、功利主義者はこれまでも、知性（intellect）、感情や想像力（feelings and imagination）、道徳感情（moral sentiments）の快楽といった人間に特有の精神的快楽を、単なる感覚の快楽である、動物的な肉体的快楽よりも一般に重視してきたが、それは前者が主に「永続性、安全性、低費用性などの点、すなわちそうした快楽の内在的な本性（intrinsic nature）ではなく付随的な利点（circumstantial advantages）」において優れていることによるものであった（ibid.: 211）。これに対して、ミルは「別の、より高次であると言える根拠」に基づいて精神的快楽を擁護できると主張し（ibid.）、次のように述べる。

> ある種類（*kinds*）の快楽は他の種類の快楽に比べ、いっそう望ましくて価値がある、という事実を認めることは、功利性の原理と完全に両立しうる。他のあらゆるものを評価する際には量だけでなく質も考慮されるのに、快楽の評価は量のみによる、というのはおかしなことだろう。 / 快楽の質の違いということによって私が何を意味しているのか、あるいは、単に一つの快楽として（merely as a pleasure）、それが量の点でより優れている（greater in amount）ということを除いて、何がある快楽を他の快楽よりも価値あるものとするのか、と問われたならば、なしうる回答は一つしかない。二つの快楽のうち、両方を経験した人の全てかほとんど全てが道徳的義務感に関わりなくはっきりと選好する方があれば、それがより望ましい快楽である。（ibid.）

そしてミルによれば、動物的な快楽とより高次な能力に由来する快楽の両方を知る人が、どんなに量が劣っているとしても、「自分の持つ高次な能力を

使用するような生き方をはっきりと選好することは疑問の余地がない事実である」（ibid.）。したがってミルの功利主義は、動物的な快楽ないし「低次な（lower）快楽」（ibid.: 212）よりも、高次な能力に由来する快楽ないし「高次な（higher）快楽」（ibid.）を高く評価することができるため、それを「豚にのみふさわしい学説」とする批判を免れることになる。

さらに後の部分でミルは、快楽の質だけでなく量を判定するにあたっても、両方を知る人々による投票以外の手段はないと述べている。この箇所には、後で解釈を行う際に重要な手がかりとなる点が含まれているため、長めに引用しておきたい。

> その道徳的な属性や帰結は別として、二つの快楽のうちのどちらがより持つ価値があるのか、あるいは二つのあり方のうちのどちらがより感じにとって心地よい（the most grateful to the feelings）のかという問題については、両方についての知識を持っているゆえに資格ある人の全員、あるいは不一致がある場合には多数派の判定が、最終的なものと認められなければならない。快楽の量の問題についてさえ、委ねるべき法廷は他にないのだから、質についてこうした判定を受け入れることへのためらいはさらに少ないに違いない。二つの苦痛のうちどちらがより激しい（acutest）か、あるいは二つの快い感覚のうちどちらがより強烈である（intensest）かを決定するのに、両方をよく知る人々による一般投票を除いてどんな手段があるだろうか。［……］経験者の感じと判定が、高次な能力と結びつかない動物的な本性でも感じることのできる快楽よりも、高次な能力に由来する快楽の方が、強度（intensity）の問題は別として、種類の点で好ましい（preferable *in kind*）、と宣言するならば、その感じと判定は同じように尊重されるべきである。（ibid.: 213）

2. 批判

本節では、前節で確認したミルの「快楽の質」の議論に対して、古くからなされてきた解釈と批判の内容を整理する。その一例として、ムーアによる議論を紹介し、また彼に代表される批判者たちによるジレンマの指摘にどのように応答するのかという観点から、近年の新しい諸解釈を分類しておく。

広く知られているように、1903 年に刊行された『倫理学原理』の第 3 章「快楽主義」において、ミルが「功利性の原理の証明」の議論の中で「自然主義的誤謬」を犯していると徹底的に糾弾したムーアは、同じ章で「快楽の質」の議論に対しても、短いが明快な批判を展開している。彼は、ミルが快楽の質を判定するための基準とした経験者の選好によって示されることを二通りの仕方で解釈し、そのいずれの場合にも、ミルの立場は一貫しないものになるということを指摘する。

第一に、経験者の選好は、ある快楽が他の快楽よりも快い（pleasanter）ということを示しているのだとしよう（Moore [1903] 130）。この場合、ミルは次のように批判されるだろう。

> いかにしてミルは、この基準を快楽の量という基準から区別できるのか。それがより多くの（*more*）快楽を与えるという以外の意味で、ある快楽が別の快楽よりも快いなどということがありうるだろうか。「快い（pleasant）」という言葉は、［……］快いもの全てに共通する何か一つの性質（quality）を意味していなければならない。そうであれば、あるものは、それが持つこの一つの性質の多寡に応じてのみ、別のものより快くありうる、ということになる。（ibid.）

すなわち、快楽の質的な優劣はそれが持つ「快さ」という性質の量的な多寡

に還元されるのであり、そうであればミルは、快楽を評価する際に、量とは別に質を考慮すべきだとは主張しえない、ということである。

第二に、経験者の選好は、ある快楽が他の快楽よりも快いということを示しているのではないが、それがより望ましいということを示しているのだとしよう（ibid.）。この場合に、ムーアの批判はより複雑なものとなる[2]。彼は「快楽が質において異なる」ということが、何を意味しているのかという点を掘り下げていく（ibid.: 131）。ムーアによれば、「ある快楽が質において別の快楽とは異なるのだとすれば、そのことが意味するのは、一つの快楽とは、複雑な何か、実際には快楽及び快楽を生み出すものから構成された何かである、ということである」（ibid.）。この直後に、「感覚的な耽溺（sensual indulgences）」とは感覚の一定の興奮とそれによって生じた快楽が一緒になったものである、と例示されることからわかるように（ibid.）、ここで彼が主張しているのは、「快い精神状態としての快楽」は、「快楽という独特の感じ」と、それを生み出すがそれとは明確に区別される感じとによって構成されている、ということである。また、おそらくムーアは、「快楽という独特の感じ」を含んでいるということが、先に見たあらゆる「快い精神状態としての快楽」に共通する同一の性質（quality）であると考えている。そうであるならば、「快い精神状態としての快楽」に質（quality）の相違をもたらすのは、「快楽という独特の感じ」とは別のもの、すなわちそれを生み出す感じの多様性でなければならない。よってミルは、そのような質の相違が「快い精神状態としての快楽」

---

[2] ムーアがまず指摘するのは、ミルが「功利性の原理の証明」の議論の中で、「欲求の程度は常に、快さの程度に正確に比例する」と主張している以上、快楽の質的優劣を認めることでミルは「あるものはより欲求されているわけではなくともより選好され、より望ましいものだとわかることがありうる」と認めていることになる、という点である（Moore［1903］130）。そうであれば、ミルは「功利性の原理の証明」の議論の中で自分が主張したことに反して、「あるものが別のものより欲求されているかどうか、あるいは快いかどうか、という点についてのあらゆる考慮とは全く独立の」判断、すなわち「直観的な種類の」価値判断を行っている、ということになる（ibid.）。しかし、ムーアのこの批判は「快楽の質」の議論そのものの整合性に関わるものというよりは、それと「功利性の原理の証明」の議論との間の整合性に関わるものであるため、本稿では立ち入らない。

を評価する際に考慮されるべきだと主張することで、「快楽という独特の感じ」を生み出す感じが、すなわち「他のものが、それに伴う快楽とは全く独立に、善であったり悪であったりしうるということを認めている」ことになる（ibid.）。ムーアによれば、そのような主張は「目的と手段を混同する誤謬」を犯している（ibid.）。なぜなら、「快楽のみが目的として善である」と快楽主義者が主張するとき、ここで善とされるのはあくまで、あらゆる「快い精神状態としての快楽」に共通して含まれている「快楽という独特の感じ」でなければならないからである。ムーアは次のように述べている。

> 「快楽」と言うとき、あなたは「快楽」を意味していなければならない。すなわち、全ての異なる「快楽」に共通する何か一つのもの、程度において異なりうるが、種類において異なりえない何か一つのものを意味していなければならない。[……] ミルのように、快楽の質が考慮に入れられるべきだと言うならば、あなたは何か他のもの、全ての快楽に現前しているわけではないものもまた目的として善であるということを含意しているのだから、もはや快楽のみが目的として善であると考えてはいない、ということになる。（ibid.: 132）

よって、「快楽のみが目的として善である」という快楽主義の見解と、「ある快楽は別の快楽よりよい質を持ちうる」という見解は矛盾する、とムーアは結論する（ibid.）。

以上のムーアの議論が典型例であるが、「快楽の質」の議論の批判者たちが、ミルがジレンマに陥ることを指摘する仕方は、次のように整理できる[3]。あら

---

[3] 『功利主義論』刊行直後の 15 年間に、「快楽の質」の議論に対してなされた先駆的な諸批判については、シュニーウィンド［1976］（46-8）を参照。また、それ以降、ムーアの『倫理学原理』刊行までの期間にグリーン、ブラッドリー、シジウィックによって行われた批判については、泉谷［1975］（80-9）を参照。さらに、現代でも概ね同様の批判がなされてい

ゆる「快い精神状態としての快楽」が共通に持っており、それを持っていることによってそれらの精神状態が快いものとなるもの、すなわち快楽の本性の多寡を、快さの程度と呼ぶことにしよう[4]。批判者たちによれば、この意味での快さの程度こそ、ミルが快楽の量としたものである。さらに彼らによれば、快楽主義の立場を採る以上、一つの「快い精神状態としての快楽」の価値を決定するのはその快さの程度であると考えなければならない。よって快楽の量に還元されない快楽の質を、快楽を評価する際に考慮に入れるべきだとすることは、快楽主義の主張と矛盾する。したがってミルは、快楽の質の差は量の差に還元されるとするか、さもなければ快楽主義の立場を放棄するかのどちらかでなければならないが、これはいずれも、ミルがテキストで明示している主張とは異なっている。

さて、本稿のはじめに述べたように、近年ではこうした批判に対してミルの「快楽の質」の議論の整合性を擁護する新しい解釈も見られるようになってきている。それは、上で述べたジレンマの指摘に対する応答の仕方によって、次の三種類に分けることができるだろう。第一に、実はミルは、快楽の質の差は量の差に還元されると考えていたのだ、とする解釈であり[5]、第二に、実はミルは、通常の意味での快楽主義の立場を採っていなかったのだ、とする解釈である[6]。これらの立場は、ミルが、ムーアらが批判する結論のどちら

ることの例として、ラザリ＝ラデクとシンガー［2017］（42-4）、森村［2018］（34-40）を参照。

[4] 現段階では、この意味での快さの程度を必ずしもムーアのように、「快い精神状態としての快楽」に含まれる「快楽という独特の感じ」の多寡であると考える必要はない。快さの程度とは何であるのかという問いへの答えは、快楽の本性を何であると考えるかによって変わってくるだろう。ムーアのように「快楽という独特の感じ」を含んでいることが快楽の本性であるとする立場は、ありうる一つの選択肢にすぎない。快楽の本性をめぐる、現代の様々な立場については、米村［2014］［2017］を参照。それでは、ミルが快楽の本性を何であると考えていたのか、という問題については、第 4 節で詳しく検討する。

[5] 例えば、高次な快楽を選択することで人は「高貴な性格」を選択しており、その性格を持つことが量的に優れた快楽を与える、と主張するロング［1992］、快楽の質の差は、ある快楽と他の快楽の間に無限の量の差がある場合に生じる、と主張するライリー［1999］を参照。

[6] この立場はさらに、ミルが望ましいものとしている「快楽」とは快い精神状態のことではない、と解釈する立場と、ミルは快い精神状態としての快楽のみが望ましいとは主張してい

か一方へ至っているとしても問題はない、ということを示そうとするタイプのものであるが、それとは対照的に第三の立場は、ムーアらによる矛盾の指摘がそもそも妥当であるかどうかを疑う。すなわち、ミルは一貫した快楽主義の立場を採りつつ、ある快楽を評価する際には量の差に還元されない質の差を考慮に入れることを主張していたが、この二つの主張は矛盾しない、と解釈するのである[7]。本稿ではこれら三種類の新しい諸解釈を一つ一つ検討していく余裕はないが、第 4 節で自分の解釈を示していく際には、それらとの共通点と相違点を極力明確にしていこうと思う。簡単に予告しておけば、私は第三の立場に分類しうる解釈を行うつもりであり、大まかに言えば、その方向性は次のようなものである。快楽の量と質は、ともに快い精神状態としての快楽の属性であるが、ムーアらの想定とは異なって、快楽の量は快さの程度と同じものではない。快い快楽ほど価値が高い、という快楽主義の立場をミルは放棄してはいないが、その快さの程度は快楽の量と質という両方の属性を考慮することで判断されるのである。

3. 連合心理学

本節では、次節で「快楽の質」の議論を解釈していくための予備的な確認として、ミルが想定していた連合心理学の考え方の概要を紹介する。はじめに、ミルが連合心理学の見解を受容した経緯を簡単に見た上で、『論理学体系』

たが、ある快楽の価値が快さの程度に比例するとは考えていなかったのだ、と解釈する立場とに分けられる。例えば、ブリンク［2013］（46-78）は前者のタイプの、スマート［1973］（13）やドナー［1991］（8-65）は後者のタイプの非快楽主義的解釈を行っている。

[7] 例えば、長岡［1983］［1985］、スコルプスキ［1989］（304-5）、クリスプ［1997］（19-43）、鈴木［2000］、スタージョン［2010］（1710-9）を参照。これらの論者たちは私と同様に、ミルにとって快楽の量はその快さの程度とは異なるものである、と考えており、特にスタージョン［2010］（1716）は、快楽の量と質は異なる二つの「快さを決定する特徴（pleasant-making features）」である、という点を強調している。また水野 [2014]は、ミルは快楽主義の立場を放棄してはおらず、また快楽の質の差は量の差に還元されない、と主張しているが、快楽の量と快さの程度との関係をどのように理解しているのか、という点に関しては不明瞭である。

の叙述に即してその特徴を確かめていきたい。

後で確認するように、ミルにとって快楽とは精神状態であり、したがって心理学という科学の研究対象であったが、そのような主題について語る際に彼が常に参照するのは、ジョン・ロックの発想に由来し、デイヴィッド・ハートリが確立したとされる、連合心理学の考え方である[8]。ミルは父のジェイムズ・ミルによって、かなり若い頃からその考え方を教えられ、きわめて大きな影響を受けた。ジェイムズ・ミルは 1829 年に連合心理学の理論書である『人間精神現象の分析』（以下、『分析』と表記）を刊行したが、ミルはこの本をきわめて高く評価しており、1869 年には連合心理学者のアレクサンダー・ベインらとともに、自らの手で序文と詳細な注釈を加えてその第 2 版を刊行している[9]。ミルが付した注釈には、「快楽の質」の議論を読み解くための重要な手がかりが含まれているため、次節で適宜参照していくことにしたい。ミルは 1843 年に刊行された大著『論理学体系』第 6 編第 4 章で、比較的詳しく連合心理学の考え方の特徴について述べているため、以下ではその内容を見ていこう。

第 4 章「精神の法則について」の冒頭でミルは、「精神という言葉はもっぱら、感じる主体（that which feels）を意味する」ものであるとし、精神現象（mental phenomena）を、「感じうる存在者（sentient beings）が抱いている様々な感じ（feelings）や意識状態（states of consciousness）」と言い換える（CW, VIII: 849）。さらに、こうした精神現象あるいは感じや意識状態、精神状態（states of mind）は、思考（Thoughts）、情緒（Emotions）、意志（Volitions）、

---

[8] ミル自身による連合心理学の歴史についての手短な説明として、『人間精神現象の分析』の「序文」（CW, XXXI: 97-9）を参照。また、ロック以来の英国経験論の伝統と連合心理学の連続性については、大久保［2013］を参照。

[9] ジェイムズ・ミルの思想形成史、及び『分析』の主な内容については、山下［1997］［2004a］［2004b］を参照。また、連合心理学におけるミル父子の見解の異同については、長岡［1992］を参照。

感覚（Sensations）から成り立つものであるとしている（ibid.）。このように精神状態を四つに分類することについては、この箇所に先立つ『論理学体系』第 1 編第 3 章「名によって指示されるものについて」の中でやや詳細に語られているが（CW, VII: 51-5）、そこでは感じと感覚の意味が明確に区別されていることに注目しておきたい。ミルにとって感じとはあらゆる精神状態を総称する言葉であり、その下位区分の一つである感覚は、肉体状態によって直接的に引き起こされる種類の感じである（ibid.: 53）。

さて、ある精神状態が他の精神状態を生み出す際に従っている法則のことを、ミルは精神の法則と呼び、心理学が目指すのはこれらの法則の獲得であるとする（CW, VIII: 850, 852）。中でも最も一般的な法則としてミルが挙げるのは、次のようなものである。

> 第一。どんな意識状態も、それを引き起こしたものが何であれ、一度私たちのうちに生じたならば、より程度の劣った同じ意識状態、すなわち生じたものに似てはいるものの、強度の点で劣っている意識状態が、はじめにそれを引き起こした原因がなくとも、私たちの中で再び生み出されることが可能となる。[……]ヒュームの言葉を使うならばこの法則は、全ての心的印象（impression）はその観念（idea）を有する、というふうに表現される。 / 第二。これらの観念、すなわち二次的な精神状態は、私たちの印象または他の観念によって、連合の法則（Laws of Association）と呼ばれる特定の法則に従って引き起こされる。（ibid.: 852）

ミルによれば、そのような連合の法則のうち主要なものは、『分析』において例証されている（ibid.: 852-3）。精神現象の全てを感じという言葉で総称し、印象とそのコピーである観念という概念を導入した上で、観念の生起していく際に従う法則を獲得しようとする、上の引用に示されているミルの心理学

の基本的な枠組みは、ジェイムズ・ミルのそれをほぼそのまま継承したものである。

さらにこの後の箇所でミルは、心理学の研究を行う際には、次の点に注意しなければならないと主張している。

> すなわち、事態が常に諸原因の合成されたものとなるとは限らないということ、つまり同時に起こる諸原因の結果が常に、それらの諸原因が別々に働いた際の諸結果の合計に正確に一致するとは限らず、それらの諸原因と同じ種類の結果になるとさえ限らないということ、である。[……]多くの印象や観念が精神において一斉に働いた場合、ときには化学的結合と似た種類の過程が生じる。複数の印象が、そのうちのどれかが容易にまた即座にそれらの印象の集合全体に対応する観念を呼び出すほどに頻繁に、併せて経験されてきた場合、これらの観念が溶け合って互いに合体し、複数の観念ではなく、一つの観念に見えるようになることがある。（ibid.: 853）

つまり、水素と酸素が化合して生み出される水の性質が、水素の性質とも酸素の性質とも似ていないように、印象や観念が緊密に連合すると、その結果としての精神状態は、その原因である印象や観念とは全く似ていない、ある単純な一つの印象や観念であるように見えるものとなる、ということであるが、ミルはこうした変化のことを、「精神的化学反応（mental chemistry）」と呼ぶ（ibid.: 854）。精神状態は複合することで異種的な（heterogeneous）ものとなる（ibid.）、というそのような発想も、彼がハートリやジェイムズ・ミルから受け継いだものである。次節では、以上のようなミルの心理学の枠組みを念頭に置きながら、「快楽の質」の議論を再解釈していくことにしよう。

4. 再解釈

本節では、「快楽の質」の議論を含む『功利主義論』の叙述と、快楽についての連合心理学の考え方が詳細に語られている『分析』の注釈を主な手がかりとして、ミルにとって快楽とは、またその量と質とは何であったのかという点を明確にすることを目指す。次のような順序で議論を進めていくことにしたい。はじめに、ミルが様々な著作中で一貫して、快楽という語によって快い精神状態を意味していたということを確かめた上で、それでは彼はそのような快楽全てに共通する「快さ」とはどのようなものであると考えていたのか、という点について検討する（4.1）。次に、鈴木真の解釈に即して「快楽の質」の議論を改めて読み直すことで、快い精神状態の属性としての量とは強度を、質とは種類によって異なる感じられ方の調子を意味しているということを確認する（4.2）。その上で、連合心理学の考え方を踏まえ、そのような快楽の種類と強度について、いっそう深く理解することを試みる（4.3）。最後に、『分析』の注釈において美の情緒が論じられている箇所の叙述に基づいて、水野俊誠の解釈を参照しつつ、「快楽の質」の議論によってミルが言わんとしていたことを明らかにする（4.4）。

4.1 快楽とは何か

はじめに、ミルが様々な著作において、快楽という語によって快い精神状態を意味していたということを確認しておきたい。例えば前節でも言及した『論理学体系』第 1 編第 3 章において、ミルはあらゆる「名づけられてきた、あるいは名づけられうるもの」は感じ（feelings）と実体（substances）と属性（attributes）の三つに分類できるとしているが（CW, VII: 46-77）、その際に快楽や苦痛は感じに含まれるものであることを明言している（ibid.: 47）。さらに、『分析』においてジェイムズ・ミルは快楽や苦痛という語を、それぞれ「快い感覚（pleasurable sensations）」と「苦しい感覚（painful sensations）」を意味

するものであるとしているが（Mill [1869b] 184）、第 1 節で引用したように、ミルもまた、『功利主義論』で快楽の量の判定について述べる部分において、明らかに快楽を快い感覚と言い換えている[10]。もっとも、ジェイムズ・ミルが快楽という語によってもっぱら快い感覚を意味しているのに対し、息子のミルは『分析』の注釈や『功利主義論』の中で、感覚のみならず美の情緒や徳の意識など、快い精神状態全般を快楽と呼ぶという違いもあり、この点には注意が必要である（CW, XXXI: 225, CW, X: 237）[11]。

それではミルにとって、そのように多様な精神状態全てに共通し、それらを快楽としている「快さ」とは、いかなるものであったのか。ミルが著作中でこの問題について論じている箇所はほとんどなく、彼が快楽の本性を何であると考えていたのかという点に関しては解釈が分かれているが[12]、上で見たジェイムズ・ミルによる『分析』での快楽の規定に対して、ミルが注釈で次のように述べていることが唯一の手がかりであると言えるだろう。

> 多くの快い、あるいは苦しい感覚の場合に、以下の点については疑問の余地がある。快楽や苦痛、特に快楽は、単なる感覚の特殊な側面または性質ではなく、感覚に加えられる何か、すなわち感覚から分離できるもの（something added to the sensation, and capable of being detached from it）

---

[10] これらの箇所を踏まえれば、『功利主義論』の生の理論において「快楽」という言葉が意味しているのは快い精神状態ではなく、典型的にはそれをもたらすような活動であるとするブリンク［2013］（46-78）の解釈は、功利主義の伝統における用語法にそぐわないことに加え、様々な著作におけるミルの叙述と整合せず、無理があるように思われる。こうした解釈に対する同様の批判として、鈴木［2000］（34-5）、水野［2014］（26-9）を参照。

[11] 『分析』においてミル父子がともに快楽を「快い感覚」と同一視しているというクエンツレ［2018］（213-15）の解釈は、こうした拡張的なミルの「快楽」の用法を見逃しており、不適当である。

[12] 例えば、ドナー［1991］（10-23）やクリスプ［2006］（113-4）は、第 2 節でその解釈を確認したムーアと同様に、ミルが「快楽」と呼ぶあらゆる「快い精神状態」に共通するのは、それが単純な「快楽という独特の感じ」を含んでいることだったのではないかと述べている。他方で、例えば、長岡［1985］（22-3）のように、ミルは快楽を欲求との関連で定義できたのではないかと示唆する論者もいる。サムナー［1996］（87-91）や鈴木［2000］（42-3）は、その両方の解釈を示している。

ではないのか。ある感覚が私たちの意識にとって、快楽の点を除けば全く同じ感覚であるように思われるにもかかわらず、あるときには他のときよりも快いものでなくなる、ということはしばしば観察可能である。これは飽満の場合、あるいは目新しさがなくなったことで味が低下した場合において確固たる事実である。たぶんそうした場合には、快楽は感覚の残りの部分とは異なる神経、あるいは同じ神経でもその異なる活動に依存しているのだろう。いずれにせよ、感覚に伴う快楽や苦痛は、（類似性（Likeness）や連続性（Succession）などの感じと同様に、）感覚から精神的に抽象されうるもの、言い換えれば、それ自身によって注目されうるものである。（CW, XXXI: 214）

この箇所でミルは、ジェイムズ・ミルのいう快楽、すなわち快い感覚を、ある感覚と、その原因とは異なる神経の活動に由来する別の感じとに分解する可能性を示唆している[13]。より重要なのは、そのような見解がどうであれ、快楽は類似性や連続性と同様に、「精神的に抽象されうる」、「それ自身によって注目されうる」感じであるとミルが主張している点である。類似性や連続性は、ミルが『論理学体系』第 1 編第 3 章で、それ以外の関係という属性とは異なる特別な属性と見なしたものであった。彼によれば、類似性や連続性はその感じが「独特な（*sui generis*）もの」、すなわち「特殊で、分解不可能で、説明不可能な」精神状態である点で、他の関係とは区別される（CW, VII: 70）。こうしたミルの見解を踏まえれば、上で引用した『分析』の注釈で彼が言わんとしていることは、快い精神状態とは、単純で分析することのできない快楽という独特の感じと、それを伴う他の精神状態が複合したものだというこ

[13] クエンツレ［2018］（219-20, 225-8）はこの箇所に基づいて、生理学が進歩して快楽を生じさせる神経系の仕組みがわかっていくにつれ、快楽が快い感覚から取り外しうる、特定の部分であるということが明らかになる可能性をミルが想定していたと解釈しているが、これは妥当であるように思われる。

とであるように思われる[14]。したがって、この点については、第 2 節で確認したムーアの想定は正しかったと言えるだろう。

さて、類似性について論じる『論理学体系』の上述の箇所でミルは、「こうした類似は、区別できないほどの類似からきわめてわずかな類似に至るまで、考えうる限りの様々な段階において存在している」とも述べている（ibid.: 71）。同様に、単純で分析できない快楽という感じにも、当然程度があるだろう。例えば、先に引用した『分析』の注釈においてミルは、「快楽の点を除けば全く同じ感覚であるように思われるにもかかわらず、あるときには他のときよりも快いものでなくなる」事例として「飽満」に言及していたが、ここでは同一の味覚であっても、飽満な状態でのそれは空腹な状態でのそれよりも程度の劣った快楽という感じしか生み出すことができない、という事態が想定されていたのだと考えられる。そうであれば、こうした快楽という独特の感じの程度こそ、第 2 節で見たように、快楽主義者がそれを評価する際に考慮すべき、ある精神状態の快さの程度であると言える。ムーアはこれをすぐさま快楽の量と同一視した上で「快楽の質」の議論を批判するのであったが、この解釈は妥当だろうか。この点を検討するために、次にもう一度「快楽の質」の議論へと立ち戻ることにしたい。

4.2 快楽の量と質とは何か

快楽という独特の感じを含む、快い精神状態としての快楽の量と質とは、いかなる属性なのだろうか。「快楽の質」の議論についての近年の新しい諸解釈の中には、快楽の量と快さの程度の同一視に反対するものもあるが、そうした立場を採る論者たちも、量と質がそれぞれ何を指すのかという点につい

[14] 快楽の本性についてこのように主張する立場は、現代では「独特の感じ説（distinct feeling theory）」と呼ばれる。この立場への批判については、またそれに抗してこの立場を擁護する試みとして、ブランブル［2013］を参照。

ては必ずしも正確に一致しているわけではない。私は、次のような鈴木[2000]（36-7）の解釈が、最も妥当だろうと判断する。

鈴木はまず、ミルが快楽の量を強度と同一視していることを指摘する（ibid.: 36）。その根拠となるのは、第 1 節で引用した、快楽の量の判定について述べる部分において、快苦の量を判定することが、「二つの苦痛のうちどちらがより激しいか、あるいは二つの快い感覚のうちどちらがより強烈かを決定する」と言い換えられており、また量ではなく質の点から精神的快楽を選好することが、「高次な能力から引き出される快楽は、強度の問題は別として、種類の点で好ましい、と宣言する」と言い換えられていることである。

さらに鈴木は、ミルが快楽の内在的な本性と付随的な利点を対比していることに注目し、それをベンタムの考え方と比較している。ベンタムは『道徳と立法の諸原理序説』において、「ある一人の人に関して、それ自体として考えられた快楽や苦痛の価値を評価する際に考慮されるべき諸事情」として強度、持続時間、確実性、近接性の四つを挙げた。また、他の快楽や苦痛と結びつくものとして考えられた快楽や苦痛の評価において考慮すべき多産性（「同じ種類の感覚、すなわち快楽なら快楽が、苦痛なら苦痛がそれに続く見込み」）と純粋性（「反対の種類の感覚、すなわち快楽なら苦痛が、苦痛なら快楽がそれに続かない見込み」）は、「厳密には、快楽や苦痛それ自体の特性であるとはほとんど考えられない」と言われる（Bentham [1789] 16）。これに対して、ミルは「永続性、安全性、低費用性などの点」を付随的な利点と見なし、快楽を「単に一つの快楽として」評価する際に考慮すべき内在的な本性として、量すなわち強度と質という二つの属性を挙げたのである（鈴木[2000] 37）[15]。

---

[15] クリスプ［1997］（32）は、「内在的な本性」という語は量ではなく質のことだけを指していると解釈しているが、ベンタムの枠組みを踏まえた上で、ミルが付随的な利点に強度を挙げていないことを考えれば、強度としての量もまた快楽の内在的な本性であると解釈する方が適当だろう。また、ドナー［2009］（20）は、快楽の量とは強度と持続時間であると見

そしてミルは明らかに、快楽の質の差が「量の点でよりよいということを除いて」快楽の価値の差を生じさせるということ、ある快楽が他の快楽より「強度の問題は別として、種類の点で好ましい」ことがありうるということを主張している[16]。よって、「ミルが質の差ということで言いたいのは、快楽は種類によって快楽の強度に還元できない快楽の感じないし調子の相違があるということ、そしてその相違も強度の相違と同様その快楽の望ましさに影響を及ぼす、ということであろう」と鈴木は結論する（ibid.）。すなわち、快楽の内在的本性である量と質とはそれぞれ、強度と、種類によって異なる感じられ方の調子のことである。しかし、このように言うだけではまだ不明瞭なところがある。以下では快楽の種類、快楽の強度とは何かということをより深く掘り下げていきたい。

4.3 精神状態の種類と強度について

快楽の質の差、すなわちその感じられ方の調子の相違、快楽の種類の違いとはどのようなものだろうか。第 1 節で確認したように、「快楽の質」の議論の中でミルが取りあげる種類の異なる快楽の例は、知性の快楽、感情[17]や想像力の快楽、道徳感情の快楽、単なる感覚の快楽、といったものである。これらはそれぞれ、そうした能力を使用する活動によって引き起こされる快楽

なしているが、鈴木［2000］（37）の指摘するように、ミルは量について語るときに持続時間については問題としておらず、また付随的な利点の中に挙げられていた永続性はベンタムが快楽を評価する際に考慮すべき事情の一つとして挙げた持続時間に相当するものであるように思われ、したがって量が快楽の内在的な本性であるとすれば、そこには持続時間は含まれないと考えられる。

[16] この点で、快楽の質の差を量の差に還元するロング [1992]やライリー [1999]の解釈は支持することができない。同様の批判として、ドナー [1991]（46-9）、水野 [2014]（43-8）を参照。

[17] なお、この箇所ではミルは feelings という語を、前節で確認したような、あらゆる精神状態を総称する「感じ」と同義のものではなく、感じの中でも情緒的な（emotional）ものを指すために用いられているように思われるため、これを「感情」と訳した。feeling という語が「哲学の言語」における感じという意味に加え、このような「通俗的な言語」における感情という意味を持っていることは、『論理学体系』第 1 編第 3 章で断られている（CW, VII: 51）。

を指していると理解するのが自然だろう。ただしここで注意しておきたいのは、だからと言って何らかの能力の使用自体にミルが価値を認めているわけではない、ということである。「快楽の質」の議論において、低次な快楽に対する高次な快楽の優越を保証しているのは、それが高次な能力に由来することではなく、あくまでそのような種類の快楽が両方を経験した人に選好されることであった。

何人かの論者は、前節で確認したような精神的化学反応によって、人間は質的に多様な快楽を持つようになる、とミルが考えていたことを指摘している[18]。それは、印象や観念が緊密に連合すると、その結果としての精神状態が、その原因である印象や観念とは全く似ていない、ある単純な一つの印象や観念であるように見えるものとなる、という変化を指すものであった。『分析』においてジェイムズ・ミルは、ミルが精神的化学反応と呼んだこのような変化を経て、はじめは快い感覚や苦しい感覚の原因でしかなかったものの観念が、それ自体として快くなったり苦しくなったりする様々な事例を示している（Mill [1869b] 188, 201-52）。例えば金銭は、快楽の獲得や苦痛の除去の手段であるために、「私たちの本性におけるほとんどの快い状態の観念と連合しており」、したがってその観念は、きわめて関心をひく[19]精神状態となる（ibid.: 206-7）。ジェイムズ・ミルはこうした事態を、快楽、すなわち快い感覚の観念と、快楽のある原因の観念が連合して一つの「快い連続（pleasurable

---

[18] 例えば、ドナー [1991]（8-65）、鈴木 [2000]（39-41）、水野 [2014]（53-4）を参照。ただし、「精神的快楽」と「身体的快楽」という「人間の快楽に関する二つの根源的な元素」が化学的に連合することで一つの快楽として感じ取られるようになる、という水野 [2014]（54）の発想は支持することができない。後述するように、ミルにとってはむしろ精神的化学反応を経て生成したものが、美の情緒などの「精神的快楽」であったからである。

[19] 『分析』においてジェイムズ・ミルは、「関心をひかない（indifferent）」精神状態に対して、快い、あるいは苦しい精神状態のことを、「関心をひく（interesting）」精神状態と呼んでいる（Mill [1869b] 184-5, 190, 196-9）。よって、金銭の観念が「関心をひく」というこの箇所での表現は、金銭によって快い感覚を獲得したり苦しい感覚を除去したりせずとも、金銭の獲得や所有の意識がそれ自体として快いものである、という事態を意味していると考えられる。

trains)」を形成している事例として説明し、さらにそのような連続の違いが、精神状態の種類の違いをもたらしていると主張する（ibid.: 251）。さて、父によるそのような説明を、ミルは注釈の中で、快い感覚や苦痛の除去の原因となるような「人物・物事・状況が、連合によってそれ自体で私たちにとって快い（pleasant）ものとなるのであり、それらに連合する多くの様々な快い観念を通して、きわめて不変的で、強烈でさえある快楽となり、私たちの気質における原初的な快楽よりも断然価値あるものとなる」、という言い方で要約しているが（CW, XXXI: 220）、こうした説明の仕方は『功利主義論』において、「功利性の原理の証明」の議論の中で「徳が幸福の一部として欲求される」こと示す際にミル自身もまた用いたものであった（CW, X: 235-7）。彼によれば、徳は金銭や権力、名声と同様に、もともとは快楽や、苦痛の除去に資するものであったために形成された連合ゆえに（ibid.: 236）、「それを意識することが快楽であるから、あるいはそれがないことを意識することが苦痛であるから、あるいはその両方の理由が結びついて」人々により欲求されるのである（ibid.: 237）。この箇所でのミルの議論が、『分析』で示されたジェイムズ・ミルの発想を踏襲したものであることは明らかだろう。快楽をめぐる、以上のようなミル父子の考え方を踏まえれば、生まれた直後は原初的な感覚的快楽しか感じることのできない人間が、経験を重ね、精神的化学反応を経て様々な種類の快楽を感じることができるようになっていく、というプロセスをミルが想定していたと解釈するのは適当であるように思われる[20]。

---

[20] 人間は観念連合によって様々な種類の快楽を感じられるようになっていく、という発想は、1749 年に刊行された『人間についての観察』において、すでにハートリが明示していたものである（Hartley [1749] 143-5, 416-99）。彼は感覚的な（sensible）快苦と六つのクラスに分かれる知的な（intellectual）快苦を区別した上で、原初的なものは前者の快苦のみであり、知的な快苦は全て観念連合の一般法則に従ってそこから生み出されることが説明されうる、ということを示そうと試みている（ibid. 416-7）。ハートリにとって、これら七種類の快楽の追求は人間の発展の諸段階に対応するものであり、そのような発展は神が定めた「完全性」へと向かっていく過程であったが、後に彼の理論を受容したジェイムズ・ミルは、そこからキリスト教的な要素を抜き取り、世俗的な教育理論として連合心理学を用いた（安川[1978]）。快楽を評価するにあたって種類の違いを考慮することを認め、人間が後天的に感

快楽の種類の違いについての、そうしたミルの見解を踏まえ、次に快楽の量ないし強度について考えていきたい。繰り返し指摘してきたように、ムーアらはそれを快さの程度と同じものであると見なしていたのであるが、果たしてミルがそのように考えていたかは疑わしい。その根拠を一つ挙げると、彼は『ハミルトン卿の哲学の検討』の中で、「感じの激しさ（acuteness）」と「感じの快さ（pleasurableness）」を明確に区別し、「私たちの持つ最も激しい感じは苦痛である」と述べている（CW, IX: 435）。第 1 節で引用した快楽の量の判定についての叙述において、「より激しい」と「より強烈である」という言葉が並列に用いられていることを踏まえれば、ここでの「激しさ」は「強度」のことであると考えてよいだろう。そうであれば、この箇所の叙述が示しているのは、強度は快楽のみならず、苦痛であっても同じように、しかも一般に快楽より多く持っている属性なのであり、快さの程度と同じものではないということである。

ミルにとって強度とは何であったのかという問題については、近年の新しい諸解釈も、十分に明らかにしてこなかった。手がかりとなるのは、観念は感覚のような心的印象に比べ「強度の点で」劣っていると述べる、前節で確認した『論理学体系』第 6 編第 4 章の叙述である。この箇所から、ミルは強度という語によって、ジェイムズ・ミルが『分析』で感じの「鮮明さ（vividness）」と呼んだものを意味していたのではないか、ということが推測できる。鮮明さは、連合の頻繁さとともに観念連合の強さに影響する要因として挙げられたものであるが（Mill [1869a] 83）、ジェイムズ・ミルはそれに関して三つの主張を行っている。第一に、感覚は観念より鮮明である。第二に、快い感覚や苦しい感覚はそうでない感覚より鮮明であり、また程度が高い快苦は程度の低い快苦よりも鮮明である。第三に、時間的により近い感覚の観念は、よ

じられるようになる高次な快楽の価値を訴えるミルの「快楽の質」の議論もまた、ハートリが描いたような人間の発展を世俗的な仕方で肯定しようとするものと見なせるだろう。

り遠い感覚の観念よりも鮮明である（ibid.: 83-5）。ミルはこの箇所に付した注釈の中で、「快楽であれ苦痛であれ単なる興奮であれ、その情緒的な側面と呼ばれうるものにおいて考慮される、感覚の強度という程度を表現する」ために鮮明さという語を用いたというベインの見解に言及している（CW, XXXI: 111）。さらにこの後の注釈では、連合を強力にするものは、連合した諸観念の強度と連合の頻繁さであるということが述べられており（ibid.: 226）、ここでミルは明らかにジェイムズ・ミルが鮮明さと呼んだものを指すために強度という語を用いていると言える。

以上の点を踏まえると、ミルは快楽や苦痛の強度について、次のような想定をしていたのではないか、という仮説を立てることができる。快い精神状態としての快楽は、それが快いほど強烈に感じられるが、このような強度は単純に快さの程度に比例するものではなく、種類によっても左右される[21]。一般に感覚的快楽は、先に見た徳や金銭の意識のような、連合によって快いものとなった観念的快楽よりも強烈である。また、一般に苦痛は、快楽よりも強烈である[22]。裏返せば、種類が同じ快楽の快さの程度については、強度のみによって比較が可能である。

しかしながら、ミルはしばしば、観念連合によって生み出された精神状態が、強度の点で感覚に劣るということを否定するような主張も行っている。例えば『功利主義論』の第 5 章「正義と功利性のつながりについて」では、

---

[21] スコルプスキ [1989]（305）が挙げる次のような例もまた、このような結論を示唆するためのものであるように思われる。「暑い日の山登りの後の、冷たいビールの快楽は強烈である。シューベルトのソナタを聴く快楽は、そのような仕方で強烈ではない。しかし私は、それでもビールを差し控え、お気に入りのシューベルト奏者のピアニストによるソナタの演奏を聴きに行くかもしれない。このときに私が期待しているのは、快楽以外の何物でもない［……］ミルは、功利主義は俗っぽいやり方で、快楽の価値を前者の種類の強度の点からのみ測定しなければならない、とする考えをかわしたいのである」。

[22] 『分析』における次のようなジェイムズ・ミルの叙述も、苦痛と快楽の強度の非対称性を示唆している。「快い感覚は苦しい感覚ほど痛烈な（pungent）ものではないので、単純な過去の快い感覚の直接的な原因が関心の対象となることは、まれにしか起こらない」（Mill [1869b] 203）。

観念連合による正義感情（sentiment of justice）の生成が語られているが（CW, X: 248-51）、その際ミルは、その感情がきわめて強烈なものであることを前提した上で、その理由を説明しようとしている。彼によれば、「正義感情における二つの本質的な構成要素は、危害を加えた者を罰したいという欲求と、危害を加えられた特定の個人あるいは諸個人がいるという知識や信念」であり（ibid.: 248）、その感情が固有の力を有しているのは、「合理的な要素のみならず動物的な要素、すなわち報復への渇望が、その感情の構成に入っている」ためである（ibid.: 250）。そしてこの渇望は、安全の利益という「並外れて重要で印象的な種類の功利性から、その道徳的正当性のみならず、その強度もまた引き出している」（ibid.: 250-1）。この箇所ではミルは、感覚的・動物的な要素から生み出された精神状態もまた、感覚と同様に強烈であると述べているように見える。そして先に見たように、ミル父子は多様な種類の快楽の生成を、もともとは原初的な感覚的快楽の原因であったものの観念が精神的化学反応を経て、それ自体として快くなるプロセスとして説明するのであった。そうであれば、全ての快楽は感覚的な快楽に由来するのであるから、その点では強度の違いに影響はなく、結局のところ、ある快楽の強度は単純にその快さの程度に比例すると考えられるのではないか。すると、ミルが「快楽の質」の議論において展開した主張、すなわちある快楽が他の快楽に比べ、強度の点で劣っていても、種類の点で優れていることがありうるとする主張は、やはり快さの程度とは別に、快楽の価値を高めるものがあるということを認めるものではないだろうか。最後に、以上のような批判に対してミルはどのような応答することが可能かを検討することにしたい。

4.4 完全性のもたらす快楽について

先に、ミル父子が精神的化学反応という考え方によって、原初的な感覚的快楽から多様な種類の快楽が生み出されるという説明を行っていたことを確

認した。しかしながら、『分析』の注釈には一箇所だけ、そうでない仕方で生成する快楽についてミルが語っている部分がある。そこでミルは、美や崇高の情緒についてのジェイムズ・ミルの見解に修正を加えている。

『分析』においてジェイムズ・ミルは、当時の思想家アーチバルド・アリソンの考察を参照しながら、美や崇高の情緒もまた、金銭の意識などと同様に、連合によって快い観念の連続がもたらされることで快くなったものである、ということを主張している（Mill [1869b] 230-52）。ジェイムズ・ミルはその議論の最後に、そのようにして生み出された美や崇高の感情（Feeling）は、「一般的な考察の対象として見るならば、完璧に単純であるように見える」が、「このような外見上の単純さは全て、多くの数の観念を、それらが多くの観念ではなく一つの観念であるように見えるようになるほどに緊密に、即座に混ぜ合わせる連合の一例にすぎない」のだとしており、ミルが精神的化学反応と呼んだ変化がここで想定されていることは明らかである（ibid.: 250）。

注釈の中でミルは、以上のようなジェイムズ・ミルの美の情緒の説明に対してサミュエル・テイラー・コールリッジらが投じた、「そのような分析は、美しいものを単に心地よい（agreeable）ものと混同している」、という批判を取り上げている（CW, XXXI: 223）。ミルによれば、「一定の数の単純な感じから生まれた複雑な感じが、それを生んだもののどれとも似ていないということ」は、「私たちの敏感な本性においては例のない事実でも、珍しい事実でもない」が、それでも、美の情緒を連合によって生成したものとする考え方は「逆説的である」（ibid.: 224）。美の情緒は、その対象について考えることで通常引き起こされる感じよりも壮大であり、そうであれば、「そのような諸々の印象を形成する連合それ自体が、特有の壮大な本性を持っていることになる」からである（ibid.）。そしてミルは、そのような美の情緒の壮大な本性を説明するために、ジョン・ラスキンの見解に言及する。ラスキンによれば、「私たちに美しいものの情緒を与えるあらゆるものは、何らかの特定の高尚

な（lofty）、あるいは愛らしい諸観念を表現、象徴しており、そうした諸観念は、彼の理解では、宇宙において具体化されていて、その創造者の様々な完全性（perfections）に対応している」（ibid.）。ミルはこのようなラスキンの考え方を高く評価し、美の情緒を、「ラスキンが挙げたような諸観念の想起と、それらの諸観念と結びついた雄大で関心をひく対象や思考の想起から成る意識状態」として理解しようとしたのだった（ibid.: 224-5）。

注目すべきは、その直後にミルが、そのような意識状態は、日常的な感覚的快楽との連合によって快くなるのではないという点を強調していることである。彼は、強風を遮るために設置された木々の仕切りを例に取ってこのことを説明している。それらの木々は暖かさや快適さ、防御の観念、すなわちコールリッジが「心地よい」としたような観念を呼び起こす（ibid.: 225）。こうした観念の大部分は、「私たちが木々について考えることに伴う快い感じに含まれるが、美的な感情（aesthetic feelings）の独特な固有の特徴を木々に与えるのに寄与することはない」（ibid.）。しかしミルによれば、「適切に言って木々の美を構成する他の要素」があり、それらの要素は、いわゆる「より高次な」私たちの本性に訴える（ibid.）。そして「それらが呼び起こす諸観念はそれ自体でより大きな力をもって想像力に働きかけるようなものであるため、それらの要素は想像力により強い刺激と深い喜びを与える」（ibid.）。このようにして生み出される美の情緒は、連合によって生成する様々な快楽の中でも「最も複雑な快楽である」、とミルは主張する（ibid.）。すなわち、以上の箇所で彼は、精神状態が原初的な感覚的快楽との連合によってではなく、特定の高尚な諸観念との連合によって快くなるという、ジェイムズ・ミルが想定していなかったような仕方での快楽の生成について語っているのである。ミルによれば、そのような快楽が喜びに満ちているのは、それらの諸観念が、「私たちの経験がそのいかなる実例も提供せず、したがってよく知られた現実をより魅力的で威厳ある世界へと高めるように想像力の能動的な力を刺激

するような完全性（completeness and perfection）の点で、私たちにとって何らかの価値ある、喜びにあふれた属性を表している」からであるという（ibid.: 225-6）。そして「こうしたことは、私たちが低次な快楽と呼ぶものにおいては生じない」とされる（ibid.: 226）。

ここで、そのような美の情緒の強度について考えてみよう。先に確認したように、正義感情のような精神状態は、それが感覚的・動物的な要素を含んでいるために強烈であるとされたのであった。これに対して、上で見たように、美の情緒の快さは、完全性の点で快い観念との連合に由来する。すると、それは感覚的快楽ほどには強烈ではないかもしれない。しかしながら、それは感覚的な快楽よりも深い喜びを与えるもの、すなわち快いものである。そうであれば、ミルが「快楽の質」の議論において、ある快楽は他の快楽に比べ、強度の点で劣っていても、種類の点で優れていることがありうると主張したのは、このような事例を認めていたからではないかと考えることができる。すなわち、異種的な快楽間においては必ずしも強度が快さの程度に比例するとは言いきれないために、快さの程度を判断する際に、強度に加えて種類の差を考慮すべきであるとミルは述べたのである。

さて、水野 [2014]（68-74）は以上のような美の情緒についてのミルの注釈に基づいて、「快楽の質」の議論で高次な快楽と呼ばれるものは、特定の高尚な諸観念によってもたらされる、と解釈している。たしかに、この注釈で論じられている美の情緒は、「快楽の質」の議論で高次な快楽とされた感情や想像力の快楽に属するものであるように思われるし、この注釈ではそれが私たちの本性の「高次な部分」に訴えるものであることが強調されており、またそれが「低次な快楽」と対比されているため、この解釈には説得力がある。すると、ミルが著作中ではっきりとそう主張している箇所はないが[23]、美の

[23] ただし、ベンタムが「厳密な意味での、人間本性の道徳的な部分―完全性への欲求あるいは是認したり非難したりする良心という感じ―」を見落としていたとする「ベンタム」の叙

情緒と同様に高次な快楽であるとされる知性の快楽や道徳感情の快楽も、完全性の点で快い観念との連合によって快くなった快楽であると考えられていたのかもしれない。美の情緒についての注釈では最後に、低次な快楽であっても「連合によってそれ自身よりも優れた諸観念を引き起こす力を獲得し」た場合には、「私たちは、その低次な快楽が美的な領域にまで上昇し、それ自身の本性には属さない特徴や質を持った快楽の要素を自らに付加したのだと感じる」ということが述べられている（CW, XXXI: 226）。先に、『功利主義論』で正義感情が報復への渇望という動物的要素を含んでいるとされていたことを確認したが、その箇所でミルは同時に、報復の感情は「それ自体では道徳的なものを有してはおらず、道徳的であるのは、その感情がもっぱら社会的共感に服従し、その要求に仕え、従うということである」、と指摘している（CW, X: 249）。そのように道徳化されている場合、報復の感情は「全体の善と一致する方向にしか作用しない」（ibid.）。そうであれば、「快楽の質」の議論において道徳感情の快楽と呼ばれているのは、動物的な報復への渇望が満たされた際に感じられる低次な快楽が、全体の善という高尚な観念によって道徳化されるとともに、より快くなったものであると考えられるかもしれない。このような場合にも、その快楽の快さの程度は、感覚的・動物的な要素ではなく特定の観念との連合によって高められているために、強度のみによっては正確に測ることができないだろう。

おわりに

本稿では、連合心理学の枠組みに基づいて「快楽の質」の議論の内容を明確にすることを目指してきた。その結論をまとめたい。ミルにとって快楽とは、快い精神状態全般を意味する語であった。多様な精神状態全てに共通し、

述（CW, X: 95）は、ミルが道徳感情と完全性を結びつけて考えていたことを示唆している。

それらを快楽としているものは、そこに含まれる、単純で分析不可能な快楽という独特の感じであり、この感じの程度が快楽の快さの程度である。快楽の内在的本性である量と質とはそれぞれ、強度と、種類によって異なる感じられ方の調子のことである。人間は、はじめは原初的な感覚的快楽しか感じることができないが、精神的化学反応によって、質的に多様な快楽を感じられるようになっていく。ミルが快楽の量、すなわち強度としたものは、批判者たちの想定とは異なって、快さの程度と同じものではなく、苦痛などの精神状態であっても有しているものである。同種的な快楽の場合、その快さの程度は強度によって比較が可能だが、強度は種類によっても左右されるため、異種的な快楽の場合は強度のみによって快さの程度を比較することはできない。例えば、完全性の点で快い観念との連合によって快くなった快楽は、原初的な感覚的快楽や、もともとはその原因であったために快くなった快楽に比べ、より快かったとしても、強度の点では劣っているかもしれない。したがって、そのような異種的な快楽の快さの程度を比較する場合には、強度のみならず種類もまた考慮しなければならない。以上が、ミルが「快楽の質」の議論で言わんとしたことであったのだとすれば、快楽の量と質は、どちらも快さの程度を判断するために考慮すべきものであるということになるから、批判者たちに対して、ミルが一貫した快楽主義の立場を採っていたと主張することが可能となる。

本稿の結論から、次のような疑問が浮上する。しばしば、ミルによる「快楽の質」の議論は、彼が快楽主義の立場を実質的に放棄するほどに大きな修正をベンタムの思想に対して加えたことの結果であると解釈されてきた。しかし、本稿の結論は、ミルがベンタムと同様、一貫した快楽主義の立場を採っていたというものである。それでは、ミルとベンタムの立場の間に大きな違いはないのだろうか。私の考えでは、その違いは、本稿では扱うことができなかった、経験者の選好によって快楽を判定するというミルの主張に現れ

ている。そして、功利主義を「豚にのみふさわしい学説」とする批判へのミルの応答もまた、この部分の議論に依拠するものと私は推測しているが、その解釈と検討は今後の課題としたい。

参考文献

ミルの著作

・*Collected Works of John Stuart Mill*, 33 Vols., Robson, J. M. (general ed.) Toronto University Press and Routledge, 1965-1981.

（CW, X: 210）というふうに、（略号 CW, 巻数: ページ数）の形で引用・参照箇所を示した。引用する場合、翻訳は自分で行ったが、適宜以下の邦訳や後に示す「その他の文献」中の引用部分を参照した。

・J.S.ミル（大關將一訳）『論理學體系 I』、春秋社、1949 年。
・J・S・ミル（松浦孝作訳）「道徳科学の論理」、『世界大思想全集　社会・宗教・科学思想篇 7: ベンタム　ミル　マルサス』、河出書房、1955 年、145-254 頁。
・J・S・ミル（伊原吉之助訳）「功利主義論」、関嘉彦（編）『世界の名著 38: ベンサム　J.S.ミル』、中央公論社、1967 年、459-528 頁。
・J・S・ミル（川名雄一郎・山本圭一郎訳）「功利主義」、『功利主義論集』、京都大学学術出版会、2010 年、255-354 頁。

その他の文献

・Bentham, Jeremy [1789] *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, Burns, J. H. and Hart, H. L. A. (eds.) Athlone Press, 1970.（ベン

サム（山下重一訳）「道徳および立法の諸原理序説」、関嘉彦（編）『世界の名著 38: ベンサム　J.S.ミル』、中央公論社、1967 年、69-210 頁（一部の邦訳を所収）。）

・Bramble, Ben [2013] “The Distinctive Feeling Theory of Pleasure”, *Philosophical Studies*, 162(2): 201-17.

・Brink, David [2013] *Mill’s Progressive Principles*, Oxford University Press.

・Crisp, Roger [1997] *Mill on Utilitarianism*, Routledge.

・Crisp, Roger [2006] *Reasons and the Good*, Oxford University Press.

・Donner, Wendy [1991] *The Liberal Self*, Cornell University Press.

・Hartley, David [1749] *Observations on Man, his Frame, his Duty, and his Expectations*, vol. I, Richardson, S..

・Kuenzle, Dominique [2018] “John Stuart Mill: “Pleasure” in the Laws of Psychology and the Principle of Morals”, in Shapiro, L. (ed.) *Pleasure: a History*, Oxford University Press, pp.201-31.

・Lazari-Redek, Katarzyna de and Singer, Peter [2017] *Utilitarianism: a Very Short Introduction*, Oxford University Press.（カタジナ・デ・ラザリ=ラデクとピーター・シンガー（森村進・森村たまき訳）『功利主義とは何か』、岩波書店、2018 年。）

・Long, Roderick [1992] “Mill’s Higher Pleasures and the Choice of Character”, *Utilitas*, 4: 279-97.

・Mill, James [1869a] *Analysis of the Phenomena of the Human Mind*, 2nd. ed., vol. I, Longmans, Green, Reader and Dyer.

・Mill, James [1869b] *Analysis of the Phenomena of the Human Mind*, 2nd. ed., vol. II, Longmans, Green, Reader and Dyer.

・Moore, George E. [1903] *Principia Ethica*, Revised Edition, Baldwin, T. (ed.) Cambridge University Press, 1997.（G・E・ムア（泉谷周三郎・寺中平治・

星野勉訳）『倫理学原理　付録： 内在的価値の概念/自由意志』、三和書籍、2010 年。）

・Riley, Jonathan [1999] “Is Qualitative Hedonism Incoherent?”, *Utilitas*, 11(3): 347-58.

・ Schneewind, Jerome B. [1976] “Concerning some Criticisms of Mill’s Utilitarianism, 1861-76”, in Robson, J. M. and Laine, M. (eds.) *James and John Stuart Mill: Papers of the Centenary Conference*, University of Toronto Press, pp.35-54.（J・B・シュニーウィンド（杉原四郎・柏經學・山下重一・泉谷周三郎訳）「ミルの『功利主義論』に関する一八六一年から七六年にかけての諸批判」、『ミル記念論集』、木鐸社、1979 年、71-106 頁。）

・Skorupski, John [1989] *John Stuart Mill*, Routledge.

・Smart, John J. C. [1973] “An Outline of System of Utilitarian Ethics”, in Smart, John J. C. and Williams, Bernard *Utilitarianism: for and against*, Cambridge University Press, pp.1-74.

・Sturgeon, Nicholas [2010] “Mill’s Hedonism”, *Boston University Law Review*, 90: 1705-29.

・Sumner, Wayne [1996] *Welfare, Happiness, and Ethics*, Oxford University Press.

・泉谷周三郎 [1975]「ジョン・スチュアート・ミルによる快楽の量と質との区別について」、『哲学倫理学研究』、第 100 号、73-110 頁。

・大久保正健 [2013]「ジョン・スチュアート・ミルと直観主義形而上学」、有江大介（編）『ヴィクトリア時代の思潮と J.S.ミル』、三和書籍、137-62 頁。

・鈴木真 [2000]「J.S.Mill における二つの快楽の質の概念と価値の快楽説」、『倫理学研究』、第 30 号、33-44 頁。

・長岡成夫 [1983]「J.S.ミル『功利主義論』における快楽の質の意味」、『新潟大学教養部研究紀要』、第 14 集、35-47 頁。

・長岡成夫 [1985]「J.S.ミル『功利主義論』における快の質的区別の意味」、

『イギリス哲学研究』、第 8 号、16-25 頁。
・長岡成夫 [1992]「ミルの心理学」、杉原四郎・小泉仰・山下重一（編）『J・S・ミル研究』、御茶の水書房、147-68 頁。
・水野俊誠 [2014]『J.S.ミルの幸福論―快楽主義の可能性』、梓出版。
・森村進 [2018]『幸福とは何か』、筑摩書房。
・安川哲夫 [1978]「Hartleian における観念連合論と進歩の観念―近代イギリス教育思想史研究の一環として―」、『日本の教育史学』、第 21 巻、71-86 頁。
・山下重一 [1997]『ジェイムズ・ミル』、研究社。
・山下重一 [2004a]「ジェイムズ・ミルの連想心理学と倫理思想（上）」、『國學院法學』、第 41 巻第 4 号、113-58 頁。
・山下重一 [2004b]「ジェイムズ・ミルの連想心理学と倫理思想（下）」、『國學院法學』、第 42 巻第 1 号、51-93 頁。
・山本圭一郎・川名雄一郎 [2006]「ミル研究の現在」、『イギリス哲学研究』、第 29 号、126-34 頁。
・米村幸太朗 [2014]「快楽―快楽が多ければよい人生か」、橋本努（編）『現代の経済思想』、勁草書房、3-29 頁。
・米村幸太朗 [2017]「欲求か快楽か、快楽だとしてもどのような快楽か？」、若松良樹（編）『功利主義の逆襲』、ナカニシヤ出版、35-56 頁。

著者名 [出版年]（ページ数）、あるいは（著者名 [出版年] ページ数）の形で引用・参照箇所を示した。英語文献から引用する場合、翻訳は自分で行ったが、適宜邦訳や他の文献中の引用部分を参照した。

（はやし かずお　京都大学大学院 文学研究科 博士後期課程）